

2021年2月14日 説教「ヨセフ、公人私人」

創世記 47章 21～31節

ヨセフの飢饉時代の対応を全開見ましたが、その続きから始まります。

1. 飢饉後に備えて (21～23節)

- ①人々を町々に (21)「彼は民を、エジプトの領土の端から端まで町々に移動させた。」ヨセフは限られた食糧を、人々に行きわたらせるために、エジプトに住む人々を町々へと移動させたのです。配給を能率的にするためでしょうか。
- ②祭司達の土地は買い取らず (22)「ただ祭司たちの土地は買い取らなかった。祭司たちにはパロからの給与があって、彼らはパロが与える給与によって生活していたので、その土地を売らなかったからである。」ヨセフはこれまでに、銀、家畜、土地を代価として、食糧を民に分けて来ました。しかし、祭司達にはパロから給与が与えられていたこともあり、食糧調達ができました。ここでの祭司というのは、エジプトにあった太陽神を奉ずる宗教の祭司です。
- ③種まきを (23)「ヨセフは民に言った。『私は、今、あなたがたとあなたがたの土地を買い取って、パロのものとしたのだから。さあ、ここにあなたがたへの種がある。これを地に蒔かなければならない。』」ヨセフは改めて、民に伝えます。つまり、彼らの財産および彼ら自身は、買い取ってあり、エジプト王パロに属するものであることを確認したのです。その上で、彼らに命じたことは、民からも要望があった穀物の種を彼らの前に示し、これを地に蒔くことでした。土地もすっかり痩せてしまっていたでしょう。その耕しと種まきを命じたのです。

2. 民は収穫を楽しみにして (24～26節)

- ①収穫の時には (24)「『収穫の時になったら、その五分の一はパロに納め、五分の四はあなたがたのものとし、畑の種のため、またあなたがたの食糧のため、またあなたがたの家族の者のため、またあなたがたの幼い子どもたちの食糧としなければならない。』」まだ飢饉の最中なのですが、収穫がもたらされるという前提での話です。その時には、五分の一はパロにとということです。これを多すぎると思うのも一つでしょう。しかし、収穫があるならばまず感謝でしょう。収穫があれば、納税もできます。それに残りの五分の四は、民のものとなるのです。翌年の種のため、民の家族の養いのため、特に幼い子供達の命を守るための食糧とせよという配慮もあったのです。
- ②民の反応 (25)「すると彼らは言った。『あなたさまは私たちを生かしてくださいました。私たちは、あなたのお恵みをいただいてパロの奴隷となりましょう。』」民の側も、ヨセフの命令を酷なものとするよりも、もし収穫が得られるならば、喜んで五分の一でも納めましょうという覚悟でした。自分達の銀などの財はなくなったとしても、命は守られてきたからです。彼らはそれを恵みだと受け取ったのです。そ



して、パロの奴隷として働く志を述べたのです。

- ③後に受け継がれ(26)「ヨセフはエジプトの土地について、五分の一はパロのものとしなくてはならないとの一つのおきてを定めた。これは今日にも及んでいる。ただし祭司の土地だけはパロのとならなかった。」そのようにして始まった租税システムは、後の時代にまで引き継がれたことが記されます。祭司の土地はパロの土地とはならなかったということも改めて書き加えられています。

3. 葬りについてのヤコブの願いとヨセフの誓約(27~31節)

- ①ヤコブは147歳に(27~28)「さて、イスラエルはエジプトの国でゴシェンの地に住んだ。彼らはそこに所有地を得、多くの子を生み、非常に増えた。ヤコブはエジプトの地で十七年生きながらえたので、ヤコブの一生の年は百四十七年であった。」ヤコブの家族が、パロの許しの下に、ヨセフが手配して、ゴシェンの地に住むようになったことは1~12節にも記されています。その時にヤコブ(イスラエル)は130歳でした。ヨセフの庇護のもと、食糧も確保され、ヤコブと家族の生活は安定していました。ヨセフの11人の兄弟達には、エジプトに来る前から子供達がいました。46章には家族総勢の数は70人であったことが記されています。その家族はその後も、増え続けていきました。ヤコブは結局余生をゴシェンのラメセスで17年も生き続けることができ、147歳にもなっていました。

- ②ヤコブの願い(29)「イスラエルに死ぬべき日が近づいたとき、その子ヨセフを呼び寄せて言った。『もしあなたの心にかなうなら、どうかあなたの手を私のもの下に入れ、私に愛と真実を尽くしてくれ。どうか私をエジプトの地に葬らないでくれ。』イスラエル(ヤコブ)も老年となり、死が近づき、ヨセフを呼び寄せたのです。そして、言いました。「あなたの心にかなうなら」とは遠慮がちですが、エジプト宰相であるヨセフに敬意を払ったのです。そして、あなたの手をももの下に入れて、愛と真実を尽くしてくれと言っています。この所作は、かつてアブラハムが最年長の僕を、イサクの伴侶探しに派遣した時にも使われました(24:2)。今回は、ヤコブは自分をエジプトに葬らないようにという願いでした。

- ③ヨセフの誓約(30~31)「『私が先祖たちとともに眠りについたなら、私をエジプトから運び出して、先祖たちの墓に葬っておくれ。』するとヨセフは言った。『私はきっと、あなたの言われたとおりにします。』それでイスラエルは言った。『私に誓ってくれ。』そこでヨセフは彼に誓った。イスラエルは床に寝たまま、おじぎをした。」ヤコブの願いは、自分の葬りを、アブラハム、イサクが葬られているカナンのマクペラの地の墓と決めていたのです。すると、ヨセフは「あなたの言われた通りにします。」と言い、誓いをしたのです。そして、イスラエル(ヤコブ)も、寝たままですが、感謝のおじぎをしました。

《結論》 先週は宰相ヨセフの政治家としての一面から、「愛に基づく知恵」と題して学びました。今週も前半は、その続きです。エジプトの民に銀家畜、土地と言った代価を求めたヨセフ。彼は飢饉の終わるまで、国民が飢餓に陥ることは、避けなければなりませんでした。それゆえに、食糧管理を統括してきたのです。しかし、主なる神の示しによるならば、飢饉の日々もあとわずかなようです。そこで、まずは民をできるだけ町やそこに近い所に集めたのです。そして民には、種を蒔かせる段取りを整えたのです。そして、収穫時には、収穫のうちの五分の一は国に納めるように命じたのです。民は、種蒔きと収穫のことを聞かされて希望がわいてきたようです。やる気も沸いてきたようです。ヨセフはパロから宰相に取り立てられましたが、その使命を果たすことにおいて、彼には先が見えてきているようです。彼のその後の働きのこと、エジプトの民の様子はこの章以後には記されていません。しかし、神への信仰に基づき、神の知恵によって働いたヨセフは、公人としての務めを遂行している様子を、この聖書箇所からよく見ることができます。

27節以下を見ると、ヨセフは私人として、カナンの地からやってきた家族のことを、絶えず配慮していたことがわかります。この記事の背景は既に飢饉が終息し、年月が経った頃です。ヤコブはこれほどまでに命を永らえるとは思ってもみなかったでしょう。エジプトにやってきてからなんと17年もたっていました。今、死を目の前にして、ヤコブはやはり約束の地のことが気になりました。永遠の希望は地上にはないと覚えつつも、神から示された地、祖父アブラハム、父イサクが葬られたマクペラのこともないがしろにできません。彼はカナンの地に葬るように、ヨセフに願ったのです。ヨセフは父の意思を尊重しました。

ヨセフは公人としても、私人としても主を見上げつつ、その愛を尽くそうと努めました。私たちにも、公人の側面と私人の側面があります。この教会にあっても、礼拝者一人一人は、神の前に出る時に公人です。神の前に一信仰者として、誰にも阻まれることなく、礼拝をささげる公人です。一方で、私たちの教会では「家庭のような教会」を目標ともしています。お互いに主にある家族として親しみます。そうした私人のような側面があります。ヨセフは公人としても、私人としても、その務めを果たし、程よいバランスを保って歩みました。私どもも、教会にあっては喜ばしく礼拝をする公人としての面と、主にある兄弟のなかにあって、家族のように私人としての面において、良いバランスを与えていただいて、歩みたいのです。マタイの福音書22:37~39に「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。」これが大切な第一の戒めです。「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」という第二の戒めもそれと同じように大切です。」とありますが、主なる神をしっかりと見上げつつ、主にある

兄弟との交わりを尊ぶという恵みをいただいてまいりましょう。